

新春対談

「夢」^{かか}掲げ、日本を元気に！

新春対談は、プロデューサー、デザイナーとして世界を舞台に活躍する山本寛齋さんと、太田あきひろ代表です。人間のエネルギーの源は「夢」として訴え、走り続ける寛齋さん。そして、かつてない景気・経済の危機打開に走る太田代表。この二人に、日本を元気にする秘けつなどを語ってもらいました。

太田あきひろ代表 寛齋さんの名刺には、「上を向こう、日本。」の文字と、赤地に白い「日の丸」がデザインされています。インパクトがありますね。

山本寛齋さん 私の思いを凝縮（ぎょうしゅく）した名刺です。今の日本に必要なものは何より「元気」です。自信を失った、うつむき加減（かげん）な日本人ではいけない！

今の日本に必要なものは「元気」

太田 「元気主義」の寛齋さんらしい言葉です。公明党のマークも「太陽」をデザインしたものです。太陽のように一人ひとりに分けへだてなく温かさを与え、力強いエネルギーあふれる日本を築くとの意義を込めています。特に今年は、その意を強くしています。ところで寛齋さんの元気の秘けつは何でしょうか。

寛齋 早寝早起きです。明け方、外気を吸い、公園の緑の中を散歩していると、細胞の一つひとつに血がめぐり、ピピッと目覚めてくる。発想がポジティブに変わり、やる気がわいてきます。

太田 元気というのは、伝わるんです。人の命を変えるインパクトがあると思います。もっと庶民の中に、元気とエネルギーあふれる日本にしていきたい。

寛齋 世界的な金融危機の中で、米国では次期大統領にオバマさんが選ばれた。また閣僚人事でも、国を挙げて乗り切ろうという気概を感じます。しかし日本は、政治の世界を見ても、大して重要ではない、細かいところでエネルギーを失わせているような気がしてなりません。

太田 確かに、ねじれ国会という状況もあり、残念ながら「内向き」な議論が多いですね。

寛齋 この大変な時に何をすべきか、そこが大事だと思います。

太田 私は昨年（08年）来、日本の未来に向けて、「安心

で安全な勢いのある国づくり」を訴えてきました。その核は、「家計を元気に、国に勢いを！」。政府・与党においても、昨年8月、10月に経済対策を決定するなど、難局打開に対応してきました。今こそ緊急事態の危機感を共有し、「非常時の経済政策」を骨太に打つことが大事だと考えています。加えて、日本社会での青年の力、また女性の力が、もっともっと発揮できるような環境を整えていきたい。特に若者が情熱を注いで物事に打ち込め、燃えカスが残らず完全燃焼できることが必要です。その実感があれば、本人も幸せであるし、そういう人が増えていけば、元気と活力に満ちた日本になるに違いないと思っています。

寛齋 「元気な日本に」との切り口でいうと、日本はまだまだ潜在能力を持っています。私は今まで、国外での“他流試合”をたくさんしてきたので、逆に日本の良さがよく見えるんです。

太田 その元気を引き出す、パワーアップの秘けつは「夢を持つこと」と訴えられていますね。

寛齋 そうです。例えば、宇宙旅行なんて、100年前は「夢物語」だったけれど、米国のケネディ大統領が、「あの月に我々の仲間を送ろうではないか」と演説し、そして「夢」を描かなかつたら何も始まらないんです。そして、その夢を叶えるコツは、いわば“狂ったように欲しがること”。夢に向かってケタ外れの情熱を持つこと。それは個人も会社も、国もみな同じです。とにかく行動に移すこと。一歩ずつでも前へ前へ、信じるところに向かうこと。止まったらいけません。

夢をガムシャラに取りに行け

太田 強き一念で、夢をガムシャラに取りに行け！ ということですね。確かに日本人は、そういう貪欲（どんよく）



公明党代表
Ohta Akihiro

太田 昭宏（おたあきひろ） 1945年（昭和20年）、愛知県生まれ。京都大学大学院修士課程修了。公明新聞記者を経て、衆議院議員当選5回。公明党代表。党東京第12総支部長。家族は妻と2男1女。北区滝野川在住。

「青年・女性^{ちから}の力」発揮を



ケタ外^{はず}れの情熱を持とう デザイナー・プロデューサー 山本寛齋 Yamamoto kansai

山本 寛齋（やまもと・かんさい） 1944年（昭和19年）、神奈川県横浜市生まれ。71年にロンドンで日本人初のファッションショーを開催。近年は東京ドームにおいて「KANSAI SUPER SHOW 太陽の船」など世界各地でスーパーショーを手がける。東京芸術文化評議会評議員、早稲田大学客員教授。



さをどこかに置き忘れてきたのかもしれませんが。ところで、昨年は北海道洞爺湖サミットで、会場やイベントの総合プロデュースを担当されて、国の威信（いしん）のかかった重要行事を大成功に導かれました。

寛齋 急な依頼でしたが、日本の実力と地球の未来がかかった重大な会議だったので、何としても成功させなければと、ものすごいプレッシャーでした。でも、「和」を基調にした現代的な美術館の中における国際会議というコンセプトで、会議場や貴賓室、各国首脳が宿泊する客室や、扇子（せんす）や手ぬぐいなどの小物に至るまで、細かいところまで気を配り、準備させていただきました。

太田 私は愛知県豊橋市の出身なのですが、その東三河に代表される伝承文化の手筒花火をイベントに使われたそうですね。手筒花火は轟音（ごうおん）と火柱がものすごい。花火師が火の粉をかぶりながら、勇壮な躍動感あふれる演出だったと。その後の夕食会は、「あのイベントは良かった」という各国首脳の会話で始まったと伺いました。

「熱き思い」は国境を超える

寛齋 日本人の心意気を伝えるにはこれしかないと思っていましたから。私自身、サミットにかかわらせていただいて、日本と世界の未来に可能性を感じることができました。

太田 寛齋さんは現在、イベントのプロデュースに軸足を置いて活動され、これまで、世界各地で「スーパーショー」を成功させておられる。私も、これまでのスーパーショーを映像で拝見しましたが、すごいスペクタクル（壮大さ）で日本の美、日本の文化、日本の元気を、世界に発信されている。寛齋さんの「熱き心」が伝染して、本当に元気をいただきました。

寛齋 昨年は、日本とインドネシアの国交樹立50周年で、いろいろな交流行事があったのですが、今年は同国のバリ島で、5月にスーパーショーを行う予定です。さまざまなパフォーマンスやアイデアを盛り込んで、誰も見たことのないショーをつくり上げたい。

太田 資金は企業に自ら手紙を書き、足を運んで集めているそうですね。

寛齋 今、我々は経験したことのない異常な経済環境に、どう立ち向かうかという苦境に立たされています。しかし、そのような状況でも、文化は絶やしてはならないと私は信じ、企業に訴えています。この熱き思いが、国境も宗教

も肌の色も超越して相手を説得できる一番の方法だと思っています。

“熱血語”で思いを叶える

太田 きっと、寛齋さんの心の奥底にあるピュア（純粋）な情熱が、人を巻き込んでいくんでしょうね。

寛齋 私ね、一昨年に体調を崩して入院し、“三途の川”をちょっとだけ泳いで帰ってきたんですが、それがきっかけで、次の世代へ“遺言”を残したいと思い、『熱き心』（PHP新書）という本を書いたんです。若い人たちには、何でもいから夢を持ち、その実現のために、言葉や身体、行動を駆使して“熱血語”で思いを叶えてほしい。そう心から願っています。

太田 熱血語は、ある意味で、公明党の「現場第一主義」にも通じると思います。私たち公明党議員は、災害といえど真っ先に被災地へ、不景気だといえどすぐ中小企業へ出向く。そして現場の涙や汗、痛みを知り、「何とかしてみせる！」との心で、身体全体で受け止めて政策をつくる。この「現場の声に答えるんだ」との必死の思いがあるからこそ、協力者も出てくるし、実績が生まれるのだらうと思うんです。

寛齋 私も、尻が軽いというか、じっとしてられません。夢を描いて、ひたすら行動し、思いを激しく訴える。今は行動せずにあれこれ言う“評論家”のような人たちがあまりに多いですね。そんな暇があるなら、日本が元気になるために、自ら行動したらいいい。夢に向かってガムシャラに頑張れば、必ず道は開けます。

太田 日本の元気のために、手を携えて、しっかり頑張りましょう。本日は、本当にありがとうございました。

